

# ネイチャー高知

No 31 2008年7月21日発行

暑中お見舞い申し上げます 暑い中ですが、夕方や夜、朝早くにはセミやトンボの羽化など、いろいろなことが観察できる時期でもあります。子供さんやお孫さんと一緒に家族観察会はいかがでしょう？

## 日本自然保護協会からのお知らせ



皆さん暑いですね。  
今年の自然調べは「カマキリ」です。  
高知からはいつも参加が少ないですが、今年こそは、チャレンジしてみませんか・・・



自然しらべ 2008・カマキリとは

「自然しらべ」は、毎年テーマ（観察対象）を1つ選び、身近な自然で全国で同時期に同じものを観察する、日本の自然の定期健康診断です。

カマキリは、日本に11種類生息しています。みんなが知っている昆虫ではありますが、いつ、どこで、どんな種類がみられるかといった情報がとても少ないのが現状です。また、種類によってくらしている場所が異なります。そこで、全国からカマキリの観察情報を集め、カマキリをとおして日本の自然のようすをさがりたいと思います。

いるのが当たり前と思っていた生きものが、気づいたら当たり前でなくなっていたということが、今次々と起きています。生物の多様性が損なわれることは、私たちのくらしの豊かさを失うことにつながります。だからこそ、日頃から身近な生きものに目を向けていることが大切です。「生きもののことは詳しくないから」という人や、何も知る機会がないまま「虫が苦手」になってしまった人などにも、楽しくカマキリの観察をしながら生物多様性の存在に気づき、生きものをみることの面白さや自然を守る大切さに気づいてもらえたら嬉しいです。

一人でも多くの方が参加して下さることが、この調査の成功のポイントです。あなたからのカマキリ情報をお待ちしています！

\*\*\*\*\*

調査マニュアルが必要な方、調査方法について具体的なことをお知りになりたい方は、連絡会事務局までご連絡ください。

インターネットが使える方は、Google の検索サイトにおいて「カマキリをさがせ」で検索をすれば必要な情報が得られます。

## 落ち葉が動く？

安芸市土居 松本 孝

(自然観察指導員 登録 NO.17502)

平成 19 年の暮れ、子どもたちの森林学習の準備もあり、安芸市内の森を歩いていたところ、落ち葉が動いていたのに気がつきました。

「こりゃなんだあ〜？」

つつくと羽をひろげて中から黄色い派手な模様が現れてびっくり！「蛾？」

目を離したら見失い、さてどこにいたのかと、また探すことに・・・。

あまりにも枯れ葉そっくりの姿に、

「お見事！」



写真の中でどこにいるでしょう。見事なものです。  
(平成 19 年 12 月撮影)

児童向けの本でカレハガの写真を見たことがありますが、その形とは違いました。

見つけた場所にはアラカシやスタジイなどがあります。その地域の植生にあった形をするのか、なんとも不思議です。

(財)日本自然保護協会発行の会報「自然保護」に、身近な動植物の「おっ！」と思った瞬間などの写真が掲載されている「フォトライブラリー」のコーナーがあり、私もこの写真を投稿したところ、3・4月号に載りました。

会報「自然保護」がある方は、「フォトライブラリー」のコーナーをご覧ください。

捕まえて飼育ケースに入れて、森林学習のときに子どもたちに見せたところ、興味深く見ていました。

子どもたちが見ているときに羽をばたつかせることもあって、中の派手な模様を見ることもできました。大人も子どもも「お〜っ！」でした。

その後、この蛾は動かなくなってしまいました。私の飼い方がよくなかったのか、死んだのかそれとも冬眠なのか、よくわかりません。

見つけた場所にまた行くこともあるので、ほかにも成虫が発生していないか、見てみようと思います。

## わたしのフィールドノート その11 高 齢 化

田 城 光 子

気になっていたものの開花時期が近づくと落ち着かなくなる。調査メンバーに連絡を取るが、現役世代は忙しい。おのずと参加者は隠居組が中心になってくる。ところが還暦を過ぎるとあちこち不具合が生ずるようで、健康上の理由から欠席者が多くなって来る。少々記憶力は落ちるが足腰はまだ大丈夫、という者だけで出かけることにした。近頃は一番大事な弁当を忘れてくる人が多くて、まずは国道沿いのコンビニに寄る。先日は黒尊の山の中で弁当がないと言い出した人が居て、分け合って食べた。

この日の目標は、大岐海岸のハマナツメの標本採集、渭南のホウヨカモメヅルと大月町のトキワスキの生育地の確認をすること。 冬の間、精力的に大岐の調査をしてくれたグッチさんは、ハマナツメやハクサンボクなどの貴重な植物を防風林内で発見したが、花の時期を待たずにはやばやと北海道へ避暑に行ってしまった。彼女にかわって標本採集にきたのだが、ハマナツメはまだ小さな蕾。そばに小さな立て看板が出来ていて、全国的にも貴重な植物であるハマナツメの存在を示している。林内に遊歩道や駐車場をつくる動きがあり、埋め立てや伐採を心配したグッチさんが立てていったのだ。彼女のすばやい行動に感謝しながら、次の目的であるホウヨカモメヅルを探して、サニーロードを走る。ホウヨカモメヅルは2004年に発見されたガガイモ科の新種で、情報量が少ない植物のひとつだ。竜串を過ぎて歯朶ノ浦トンネルの手前で旧道に入った。道幅は車一台がやっと通る広さ。片方は断崖絶壁で下は海。反対側を見上げると、はるか上まで花崗岩の崖がネットで防護されている。ふたりの「目方さん」と呼ばれる乗客が乗り降りするたびに、車が大きく左右に揺れる。生きた心地がしない。わたしは軽症の高所恐怖症なのだ。

「旧道へ入るがが、ちいと早すぎた」

「引き返そう」

「ここでは車は回せれん。まわしよったら崖から落ちる」

もう覚悟を決めて通り抜けるしかない。少し道幅が広がったところで車を止め、歩いてみた。なんと、そこにはまるで紅紫色の星をばらまいたように、ホウヨカモメヅルの花が満開であった。個体数を数えていたが、あんまりたくさんあるので最後は「ようけあるね」で終わった。

マルバマンネングサ、タイトゴメ、ハマナデシコ、ツメレンゲなど、迷い込んだ者だけが目にすることのできる花園だった。昔、この道は県交通のバスが走っていた。ホウヨカモメヅルは齒朶ノ浦から貝ノ川を経て、小才角、月山神社付近まで成育していた。足摺半島には分布があるのかどうか？まだわたしたちは確認していない。

大浦分岐でサニーロードを外れ、大浦に入る。この集落の小さな川沿いで以前見たススキが気がかりだった。近づいてみる。大きく穂が膨らんでいた。トキワススキに間違いはない。堤防に沿って数十メートルにわたり群生している。長沢と大浦、2箇所の生育地が確認できた。トキワススキは普通のススキに比べ、非常に大きな株を作る。葉の幅も広い。花序も長く開花時期も早い。7月には咲きお盆前には花は終わっている。ススキとは大きな違いがあるので、すぐに見分けられるはずだが、やはり分布が狭い範囲に限られているのだろうか。なかなか見つからない。長沢のトキワススキも大浦同様、穂が大きく膨らんでいた。去年は花の時期を逃したので、今年は7月中に来てみようと思う。その頃になれば大岐のハマナツメの花も咲いているだろうし、イヨカズラかホウヨカモメヅルか判断しかねるガガイモ科も結実し、より同定が確実にできるようになっているかもしれない。

心配した空模様も変わることなく、順調に調査もすすんで予定どおり中村に戻ったとたん、目方氏が「ありゃ、いかん。荷物を忘れてきちよる」。昼食を摂って、咲き乱れるホウヨカモメヅルに見とれてしまった小才角の、お月さんもいろいろの銅像のある休憩所に、リュックサックを置いてきたらしい。途中で採集した名前のまだわからない木の枝は、しっかりと握っていたが。



写真は「トキワススキ」

いがりまさんの[【植物図鑑・撮れだてドットコム】](#)から写真をお借りしました。

砂浜美術館 T シャツアート展の片隅で、自然観察コーナーを開いた。クイズに答えながら楽しく自然観察。机の上にたくさんの木の枝を置き、来場者を呼び込む。好奇のまなざしをちらりと向けるが、ほとんどの人は通りすぎてしまう。たまに何をしているのかと聞きながらテントの中を覗き込む人がいると、すばやくつかまえてクイズを出す。

<初級コース> 葉っぱの数は？

センダンやナンテンといった複葉を並べ、どれが一番葉っぱの枚数が多いかと問う。真剣に小葉の数を数える人、これにはきっと落とし穴があるに違いない、と腕を組んで考え込む人などさまざまだが、どれも一枚の葉っぱであることを説明すると、反応はみな、「えつ、えつ、うっそ！ほんとう？」来年は複葉になった理由についても、みんなで考えてみよう。どんなおもしろい答えが飛び出すか、楽しみだ。

<中級コース> 五感を使えばよく観える

アカマツとクロマツの枝を置き、自由に触れてもらう。臭いをかいだり手で触ったりするよう、さかんにけしかける。その後で、周囲の松原の中に入りマツの木を観察。新しい枝が伸びて先端には雌花、基部には雄花が咲いていた。茶色のマツボックリと緑のマツボックリもついている。観察するには最適の状態。みんなはここでもマツに触れてみた。そしてふたたび机の上のマツの枝を見してみる。その結果、松葉の先端に触れた時、痛いのがクロマツ、痛くないのがアカマツであるという、簡単な見分け方にほとんどの人が気がついた。五感を使った自然観察は楽しいし、体で感じたことは忘れない。

<上級コース> 植物にも男と女？

愛媛県愛南町からきたというおばちゃん4人組。ヤマモモの枝を選び、間違いなくヤマモモだと同定してくれた。そして話し始めた。「ヤマモモは花がよう咲いたら実がならん」「そうそう、花が咲いてないと思うたら実はようけなる」。どうやら雌雄があることはご存知無いらしい。雄花

はよく目だち雌花はとても地味。その地味な雌株にだけヤマモモの実がなるんですよ、という、ビックリしていた。ヤマモモは公園や街路などによく植えられているが、赤い実がぼたぼた落ちて踏み潰されるととても見苦しい。そこで花はきれいで実のならない雄株のほうが好んで植えられるようになった。そのため、伊豆の自生地では雄株ばかりが採られて花粉不足をきたし、結実率が落ちているのだそうだ。庭に植えたクロガネモチに赤い実がなることを期待したのに、何年たってもならないと嘆く人もいる。こちらは雌株がほしかったのだろうに、気の毒としか言いようが無い。

数年前、池のそばのウリハダカエデに突然実がなりだしたかと思うと、あっというまに枯れてしまった。周囲には2000株以上もの実生が残った。ウリハダカエデは、成長の過程で雄から雌に性転換し、ある年、たくさんの果実をつけてまもなく枯死するのだという。栄養状態により性転換するものには、サトイモ科のマイツルテンナンショウやマムシグサなどもある。

植物学的な性別では無いが、人間がオン（雄）、メン（雌）とよんで、生活の中で使い分けているものもある。お正月の門松は、オンであるクロマツとメンのアカマツを対で飾る。ウバユリは昔からカタクリの代用としてその鱗茎から澱粉をとった。いまでもウバユリのことをカタクリと呼ぶ人は多い。わたしも教えてもらってカタクリ作りをやったことがある。きめの細かい、よい澱粉が取れた。カタクリ作りに適した時期かそうでないかを、オン、メンで区別していると話してくれた。ウバユリは花を咲かせるまでに6～8年かかるそうだ。広い根生葉を多数出し、この時期をメンと呼ぶ。メンの時期のユリ根は太く、これを掘って澱粉をとる。地下に十分栄養が貯えられると花茎を伸ばし花を咲かせるが、花の時期をオンと呼ぶ、開花結実にはたいへんなエネルギーを必要とするから、オンになると鱗茎は小さくなっている。とてもカタクリ粉をつくれるような状態では無い。この頃には、艶やかだった葉は色あせて、種子散布しながら枯れていく。オンと呼んでいる時期こそが植物としては雌なのである。しかし人間の役にたつのは澱粉がとれる時なのである。年がいても女はなにかと家の中では役に立つ場合が多い。おじいよりもおばあのほうが重宝がられる。そういう意味で、ウバユリは根生葉の時期をメンとよんだのかも知れない。ヒトも植物も、次の世代に生命を引き継ぐためにせいっぱい生きている。基本的にはなんら優劣も変わったところもない、知恵を持った生き物たちなのだ。そう思うと、すべてが愛おしい。

## 野山での拾いもの（番外編） シカ・カモシカ

坂本 彰

最近シカのことばかり書いて恐縮ですが、今回もまたシカのことになります。

7月12日に山の会の仲間と一緒に、旧物部村の中東山に登りました。ここは、別府溪谷の奥にあり、高知県で最後にツキノワグマが捕獲（銃殺）された場所です。また、ニホンジカによる被害が早くから言われている場所でもあります。

当初の計画は、中東山に登った後、石立山へ縦走しようという張り切った内容でしたが、中東山に行き着く前に頓挫してしまいました。この原因もニホンジカによるものでした。一行は6人のメンバーで、一番若いのが58歳という「ベテラン」揃いです。そのメンバーの一人が、前後の間隔が開いてしまった時、登山道からシカの踏み跡に入って、一行からはぐれてしまいました。幸いなことに1時ほどで無事に合流できましたが、山の中は登山道よりシカの踏み跡の方が立派に見えるところもあり、登山用語でいう「ルートファインディング」をしっかりとしないと、事故につながりかねないという厄介な状況になっています。

登山道沿いにも、シカの落とし物や死体（骨）が多く、最近谷の水も、地下から湧きだしたすぐ近くでないと飲むのを避けています。中東山でも、谷川で顔を洗おうとすると、川底に骨が沈んでおり、泥で汚れた手を洗うのにとどめました。

翌週、20日には妻と三嶺に登りましたが、ここもシカの痕跡がたくさん見受けられます。痕跡だけでなく、堂床で白いお尻を向けて逃げていったのを皮切りに、盗人沢近くで、その上流の崩壊した沢の近くで、警戒音を発せられました。頂上手前の水場にもシカの糞がパラパラとあり、下山の際も、樹林帯の上端のあたりから盛んに警戒のための鳴き声か聞こえ、相変わらず多くのシカが標高の高い所に登っているのが推察されました。

植物も一部を除いて被害が深刻で、花の写真もこれといった成果がなく、さおりが原との分岐近くまで下ってきた時に、妻が「お父さん、あれあれ・・・」と指をさします。こちらはタニタデの写真を撮りたくて、下ばかり注目していたので気がつきませんでした。指さす先には、カモシカが岩の上で寝そべっていました。カモシカもこちらに気が付き、のそりと立ち上がったので、レンズを取り換える暇もなく、植物撮影用のマクロレンズで撮ったのがこの写真です。しばらくポーズをとってくれた後、ゆっくりと沢を渡って左岸側の森の方へ行っていました。

森林総合研究所の奥村さんによると、シカの増加によってカモシカの生息環境が悪化し、表面的に分布が拡大しても、生息密度が希薄な地域が拡大し、地域個体群の存続が危ぶまれる可能性もあるとのこと。

三嶺でも、あれくらい環境が変われば、植物だけでなく、昆虫や野鳥などの森の生き物へも大きな影響があるのではと心配します。



## 森林総合研究所四国支所一般公開のお知らせ

四国で森林・林業に関するいろいろな試験研究を行っている、森林総合研究所四国支所の一般公開が次のとおり行われます。当日は、子供さん向けの「夏休みの宿題を応援する」催しも計画されています。

主な内容

### 【研究成果の公開】

四国支所が行っている研究内容、成果をパネルで紹介します。

### 【公開講座】

研究職の方が分かりやすくお話をします。もちろん、子供さんもOKです。

「虫のくらしのいろいろ」 13:00～13:30

「樹になる種のいろいろ」 13:30～14:00

### 【実験林案内】

構内の実験林・樹木園を案内します。「緑」と「森林浴」楽しめます。

10:00出発

### 【夏休みの宿題を応援するコーナー】

- ・ 木のねんどコーナー  
おがくずを利用した環境にやさしいねんどをつかって、キーホルダーを作ります。
- ・ 自由工作コーナー  
木材、小枝、木の実を使って、オリジナル作品を自由に作ります。  
(終日実施しますが、材料がなくなった時点で終了させていただきます)

森林総合研究所の場所は上の地図のとおりです。

お問い合わせは、森林総合研究所四国支所連絡調整室 TEL 088-844-1121 まで



「ネイチャー高知」の原稿を募集します。「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

### 「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 31

事務局 780-8075 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp